

【題目】

文学研究における音声及びその学術用語をめぐる学史的 research

【要約】

文学における音声と文字は常に流動的に共存・交流するものである。申請者はこの前提に立ち、〈文学＝文字〉の前提を越えて、音声言語の素材としての側面からより広く文学研究の可能性を拓くことを目標としている。第一編では、音声と文字との共存・交流の見出せる文学の実例を挙げながら、そうした〈文学＝文字〉の前提にとらわれない文学研究——文学における音声把握の方法の現状を確認する。

研究主題の背景には、申請者が上代文学研究として、古代歌謡であり且つ国風歌舞として現存する来目歌を扱ったこと、また『萬葉集』東歌・防人歌における編集時点での文字上での音韻操作、すなわち創作東国方言の存在の可能性を論じたということがある。

では、そうした音声と文字との共存・交流の様を学的に扱うことのできる理論・枠組としては、如何なるものがあるか。文学の中でも申請者の専攻する上代文学には音声と文字との共存・交流として見ることのできるものは多いが、上代文学研究における音声と文字の問題を扱うにまず想起されるのは、〈口誦から記載へ〉という文学史記述に定番の図式であり、またこれに伴う「口誦文学」「記載文学」という学術用語であろう。しかし、〈口誦から記載へ〉という図式は、日本語と日本文学における言語と表記の複層的な問題を、非常に単純化してしまうものである。音声と文字とを二元論的に分ち、前者から後者へという単純な進化史的な筋道に還元してしまうこの図式及び学術用語は、あたかも文字表記術の獲得というドラマティックな一回限りの出来事を境に、音声は過去に既に完結した遺物としてしか把握することのできない懸念がある。

加えて〈口誦から記載へ〉に関わる先行研究の状況を広く眺めたとき、文学における音声扱う近代の学問領域や学術用語の雑多、またそれに起因して現代の研究史には混乱が生じていることが明らかになる。音声と文字との複雑な交渉を文学研究の中で適切に把握し評価していくためには、第一に、二元論的且つ進化論的な価値観を伴って今も尚根強い影響を持つ〈口誦から記載へ〉の既存の枠組を見直すこと、すなわちその背景にある近代科学の学術史を、各学問の音声把握の立場や方法を反映してきたものとしての学術用語の歴史とともに整理することから始めるべきである。これは先行研究の混乱を解消し、議論の下地を整えるためにもまず何より必要なことである。

第二にはそうして基礎を築いた上に、〈口誦から記載へ〉の枠組の持つ問題点を確実に見極め、そこから再出発し、音声と文字との絶えざる交渉を理論的且つ現在未来の研究史上持続的に取り扱っていくための新たな枠組へと繋げていくことを目指す。

第二編では、第一編で行った問題提起に基づいて、以降には実際に国文学と民俗学とを主軸とした音声研究の学術史及び術語史を展開していく。

本編では明治期国文学を扱う。明治期は近代科学としての国文学の出発の時期であった。その中で、元来中国語由来であった「文学」概念は、西欧の *literature* との交渉、また東京大学における教育制度・組織の改編の中で、日本の人文学及びその下位区分に属する文字による言語芸術の意を指示するものとなった。一八九〇年刊行の三上参次・高津鋳三郎『日本文学史』以後、国文学では文学史研究が盛んになるが、そうした文字で書かれたことを前提とする「文学」の歴史を叙述するに際して、音声は、およそ未開性を強調されるか素朴ゆえに純粋とされるかといった状況で、音声による言語芸術として学術用語によって一概念として取り出されることはなかった。こうした音声の位置づけには、西欧の文学史に倣った発達史的な価値観が働いていたと考えられる。

第三編では、明治期から引き続く大正期国文学、及び大正期の雑誌『郷土研究』を出発点とする民俗学を扱う。

大正期国文学においては、学術史及び術語史上、音声と文字の共存・交流の把握を困難なものとしてきた大きな問題点の一つを指摘することができる。

その問題とは、特に上代文学について音声を探る場合、日本文学史上のいわゆる〈口誦から記載へ〉という進化史的な図式が確立したことである。当該図式に関する議論は大正期に国文学内外に文学史研究（文学の起源・発生・展開）が流行した中、日本の学術界で広く認知されたモールトン *Richard Green Moulton* の文学論における文学進化の法則〈*Floating (Oral) Literature* から *Fixed (Written) Literature* へ〉との交渉に端を発する。特に一九二三年の邦訳刊行以後、国文学者は日本文学史の記述にこの学術用語を伴った〈音声から文字へ〉の単純明快な進化の公式を多用し、昭和初期に至るまでこの傾向は続くこととなった。しかし、その一方ではモールトンの名には触れないことも多く、文学史の周知の論理として内在化し、ただ「受容」というに留まらず各自の専門領域や方法論に拠って〈音声から文字へ〉の意味を多様に——音声と文字の共存・交流を模索する最初期の例といってもよいほどに——再解釈・再構成していた一部の国文学者の成果もあった。

なお、大正期は民俗学の出発の時期でもあり、柳田國男やその弟子である折口信夫らによって民間伝承の採集・分類が行われていた。文字記録に拠らない民間伝承は、その対象としてまさに口碑や民譚といった音声言語芸術を含んでいたが、大正期当代には民間伝承

の分類基準・名称ともに未だ統一されてはおらず、各学者それぞれの裁量によって音声に言及し呼称する状況であった。

第四編では、昭和初期の国文学と民俗学をそれぞれ確認、続いて両者の学問体系及び学術用語の対決の様相を観察し、最後にその対決以後の研究史の概観を示す。

昭和期においては、学術史及び術語史上、音声と文字の共存・交流の把握を困難なものとしてきた第二の大きな問題点を指摘することができる。即ち国文学と民俗学と両者の学術用語が、語義と用字との両面から、且つ一九三二年という明確な画期をもって対照されたことである。これは国文学と民俗学両者の学術用語の背景にある理論上の制約——歴史学として用いることのできる資料・史料上の問題、特に音声言語の実証性の如何——によるものであった。

昭和初期の国文学は、大正期に生じたモールトンの *oral literature* の訳語の一つ《口誦》を用いたが、新たに「文学に於ける口誦性」という観点・用語法が生じたことから推察できるとおり、その方法論が文献資料に拠る〈断絶の歴史〉である以上、音声は歴史上の過去の一時点に取り残され実感を伴わない存在でしかなく、現存文献から実証＝再生することはできないという方法論上の限界を自覚していた。一方、民俗学の中でも特に柳田は、一九三二年に『岩波講座日本文学』上にて国文学に対して直接の論戦を挑んだ。柳田はフランス民俗学の *la littérature orale* を訳して《口承》文芸とし、これを自身の扱う民間伝承としての音声言語芸術を指示する学術用語として提示した。柳田民俗学の方法論は現在にまで生きる民間伝承に拠る〈連続の歴史〉による経世済民の歴史学であるから、音声は現に実体を伴って生きる存在である。

よって国文学の用いる文献資料のいわば過去に死した一回限りの《口誦（そらんずる）》と、現在にまで生きて伝えられてきた民間伝承の《口承（うけつたえる）》とは、語義と用字との両面から、音声言語の歴史上の位置・性質・価値を明確に対照するものであったといえる。事実、一九三二年を境として、それまで個々人で様々に用いられた学術用語が、国文学と民俗学とで《口誦》《口承》と用字の内部統一、またその結果両者対照の様となった。

柳田の挑戦とは、国文学の扱う言語芸術が音声に言及しながらも実際には文字のそれに限られることに疑義を呈し、自身の対象である真に音声としてのそれをも含めて「一国文学」とすべきことを主張したものであった。しかしこの論戦以後、そうした言語芸術上の交流は直ぐには達成されなかった。《口誦文学》《口承文芸》の対照的な学術用語も、これ以後はほとんど用例が固定されたといっている。

実践的な交流は、折口信夫その人、また彼の系統に連なると見える民俗学的国文学の系

譜によって蓄積されていった。特に戦後の思潮においては、文学の社会的意義の見直し、また文学を通じて一国の文化の基礎や生成過程を明らかにしようとする形で、「民俗文学」が重視されることとなった。

文学における音声と文字の学術史において、国文学と柳田民俗学とのそのような学問体系による制約を前提としない、いよいよ純粹に言語の素材（オラリティ・リテラシー）への関心を浮上させたのは、そうした一九四〇年代以後の「民衆的基盤（松尾葦江の用語）」の研究の具体的な一領域としての軍記物語と語り物研究に連なり、一九六〇年代に至って新たな傾向として注目された、叙事詩の口頭的詞章構成法（オーラル・コンポジション）で知られるパリー＝ロード理論の輸入であった。これによって日本文学研究は生きたオラリティ・リテラシーの観点を獲得、文学に行為即ちパフォーマンスの場を想定することとなった。

第五編では、音声発見の学術史及び術語史を総括し、音声と文字の共存・交流の把握を可能にするために踏まえるべき課題を再確認し、今後の展望を示す。

文学研究における音声発見の学術史を術語史として検討し、同時に音声と文字の共存・交流の把握を困難なものとしてきた二つの大きな問題点を見直したことで、議論すべき根幹として、歴史的存在としての文学作品、その歴史＝時間の把握・叙述方法、またその時間の把握・叙述のための現存資料の姿形（文献か音声か）という点が、重要な論題となることが再確認できた。また同時に、その論点を十分考慮したうえでなお困難を越えていくための有効な展望・足懸かりをも得ることができた。

音声と文字との交渉を双方向的且つ幾たびも重ねられるものとして捉えるためには、歴史を〈過去－現在〉の線分上に把握するのでは足りない。その線分の中に複数の点、すなわちその文学を形成した複数の場と行為を見出す必要がある。またそうして文学作品における歴史を、場と行為との積み重ねとして捉えるのであれば、それを明らかにする資料として、音声のように生きた資料は勿論、文献資料を活用することも可能となることに注目したい（たとえば古代歌謡である来目歌は、『日本書紀』の記事中、宮廷儀礼として同時代的に演ぜられていた紀編纂時点での「今」の様子は勿論のこと、さらにその「古式」や「由縁」即ち紀編纂以前の音声単独時代に演ぜられたより古い段階まで、実際に声に出し歌われた行為の特徴が記述されている。そしてそれは今日、国風歌舞として現存する）。

したがって申請者は、文学を出来事（場）と行為の累積されたものと捉え、歴史的研究の立場の一つとし、その累積を紐解き展開すること、またそうして展開した出来事と行為の中にこそ生きる音声と文字との絶えざる交流を把握する可能性を提案する。よってここでは出来事と行為とを把握し史上に展開するための有効な視座として、前述のパリー＝

ロード理論とそれを受容した中世文学の成果に借りつつ一部私に独自の項目を立て、次の五つの分析項目を提案する。

Composition 制作／**Performance** 上演／**Appreciation** 享受／**Transmission** 伝達／**Preservation** 保管

パリー＝ロード理論において「**Transmission** 伝達」に該当するものとは、いわば長年に亘って蓄積され伝達されてきた表現類型である。しかしここで留意すべきことは、**Transmission** にはさらにもう一つ「蓄積」という行為が含まれていることである。つまり、プロットやストーリーパターン、またフォーミュラといったものは、「伝達」されるのみならず、前提としてそれ自身「蓄積」される行為を含んでいる。

パリー＝ロード理論（口頭の文化を前提とする）から文字文化への応用も試みる場合、この「蓄積」されるものとは必ずしも表現類型のみとは限らないし、したがって「伝達」するものもその類型のみとは限らない。具体的には、文字文化における「蓄積」は、歌ことばや話型などの類型の形成をも意味することは勿論であるが、同時に文字文化独自にさらに視野を拡大すれば、広義の「記録」もこれに含まれるであろう。たとえば音声や身体動作の一方に併存する文字によるその覚え書き、その記されるところのモノとしての書物、またよりメタ的には書物における書き入れに見る生きた人間一人ひとりの解釈の積み重ねなど、いずれもいわば知の蓄積ともいうべき行為をも新たに把握することができる。

このように音声文化と観点を共有しつつ文字文化独自に拡大することもできるものとして、「蓄積」「伝達」にそれぞれ独立した新たな位置を与え、ともに対象を拡大した上で積極的に検討すべき領域であると考えた結果、「蓄積」の側を、そのとおりの行為の質をも拡大したという意味で一箇の位置を与え、新たに立項して〈**Preservation** 保管〉とした。

「蓄積」のままではなく「保管」の意義を付与したことは、音声や身体動作の一方に併存する文字による覚え書きなども、ただ記して終わるのではなく、記した紙乃至は書物を保存・保管しなくては、蓄積が実現しないからである。

以上のとおり、音声も文字も、有形も無形も含んで、広く人間の営みの中に構築される「出来事（場）と行為の累積」としての文学は、過去から現在への線分上におけるものでもなければ、現存資料の姿形を制約とするものでもなく、積み重ねられたその場その度毎に生きる時間を展開することであり、それは生きた資料に拠っては勿論、文献資料の中に見出し再生することも可能となるものであると考える。

以上